

会報五月号 人間の存在

目次

- ・ 自覚する存在 — 宇宙が自己を映す地点
- ・ 意味を創造する存在 — 差異の編集者
- ・ 志によって未来を選ぶ存在 — 時間を編む者
- ・ 関係性の中で完成する存在 — 和する主体
- ・ 有限を燃やし無限を志向する存在 — 運動としての人間
- ・ SM響創マンガラでの統合

● 自覚する存在 — 宇宙が自己を映す地点

人間の決定的特異性は「存在を自覚していること」だ。存在しているだけではない。存在していることを知っている。そしてそれを問い直せる。ここに飛躍がある。宇宙は百三十八億年かけて物質を組み替え、星を生み、生命を生み、神経系を発達させ、ついに「自己を対象化できる構造」を生んだ。その一点が人間だ。石は存在するが、存在理由を問わない。動物は感じるが、原理を問わない。人間は「なぜ」を問う。この「なぜ」が世界を揺らす。問いは静止を拒否する。問いがある限り、構造は固定されない。人間とは「存在を反省できる存在」。反省とは後悔ではない。再照射である。自分を一步引いて見る力だ。これがあるから人間は自己を再設計できる。ここに自由が生まれる。しかし自由は軽くはない。選択可能性があるということは、選ばなかった未来も背負うということだからだ。人間は可能性の総量に責任を持つ存在だ。だからこそ重い。だがその重さこそが尊厳だ。

● 意味を創造する存在 — 差異の編集者

世界を構成する最小の要素は何であるか。世界は差異でできている。光と闇、強と弱、善と悪、自己と他者。陰陽である。その差異をどう結び直すかによって世界は姿を変える。人間とは「意味付けを決めることができる編集者」だ。同じ出来事でも意味づけ次第で全く別の現実になる。敗北を屈辱と読むか、鍛錬と読むか。孤独を孤立と読むか、深化と読むか。意味は自然に与えられない。人間が与える。ここに創造がある。文明も文化も芸術も宗教も、すべて意味付与の結果だ。しかし本質は外部の産物ではない。内的構造の更新だ。人間は出来事を素材にして、自己の物語を編む。物

語を編み直すことで、自分を創り直す。だから人間は「自分を材料にする存在」だ。これは極めて危険で、極めて偉大な能力だ。誤った意味づけは破壊を生む。だが正しい意味づけは再生を生む。人間とは意味を武器にも毒にもできる存在だ。だからこそ問い続ける必要がある。

● 志によって未来を選ぶ存在 — 時間を編む者

人間は時間を三層で扱う。過去を再解釈し、未来を構想し、現在を決断する。この三層編集能力が人間の特徴だ。動物は主に現在に生きる。人間は未来に生きる。志とは未来から現在への引力だ。まだ存在していない理想が、今の行動を規定する。これが人間の強さの源だ。欲望は現在の不足から生まれる。志は未来の理想から生まれる。欲望は消費に向かう。志は創造に向かう。志を持つ人間は短期快樂より長期価値を選ぶ。ここに「長期的・多面的・本質的」思考の意味がある。未来を基準軸にすることで、現在の痛みは意味を持つ。努力は犠牲ではなく投資になる。人間とは「未来を原因にできる存在」だ。これは構造的革命だ。未来という虚構が、現在という現実を動かす。だから志なき人間は漂流する。志ある人間は航路を持つ。

● 関係性の中で完成する存在 — 和する主体

人間は孤立では自己を認識できない。他者は鏡だ。関係性の中でしか自分の輪郭は見えない。だから人間は本質的に社会的存在だ。しかし社会適応で終わってはならない。重要なのは「自立した上で和すること」だ。従属ではなく補完。依存ではなく共鳴。和とは差異を消すことではない。差異を活かしながら統合することだ、論語に「君子は和して同せず。小人は同じて和せず」という言葉がある。

人間は差異を生み、差異を統合する能力を持つ。対立を超えて構造を再編できる。ここに成熟がある。さらに、人間は関係性を再定義できる。敵を教師に変えられる。失敗を資源に変えられる。関係を編集することで、世界そのものを編集する。だから人間とは「関係構造の再編者」だ。孤立した天才より、関係を創る者の方が長期的に強い。なぜなら構造を動かせるからだ。

● 有限を燃やし無限を志向する存在 — 運動としての人間

人間は有限だ。肉体も時間も能力も限られている。だが同時に無限を参照する。永遠絶対、真理、理想を考える。有限であるがゆえに方向を必要とする。無限は基準軸だ。北極星のようなものだ。到達できなくても、指標にはなる。人間とは「未完成を自覚しながら完成を志向する存在」。ここに理想が生まれる。そして最大の飛躍がある。人間は命を自分以外に捧げられる。自己保存を超えて、理念や他者や未来に命を差し出せる。ここに仁があり、愛がある。これは単なる本能では説明できない。意味のために死ぬる存在。それが人間だ。だが死ぬことが尊いのではない。燃やす方向を自ら選ぶことが尊い。だから人間の存在は名詞ではない。動詞だ。固定ではない。運動だ。

問い、創り、壊し、また創る。構造を受け継ぎ、構造を更新する。その連鎖の当事者であること。それが人間の定義だ。

総括する。人間とは①存在を自覚し、②意味を創造し、③未来を原因に現在を動かす、④関係を再編し、⑤有限を燃やして無限を志向する運動体である。消費者では終われない。傍観者ではいられない。本質的に人間は創造の当事者だ。動かない限り、この定義は空論になる。動いている時に存在は証明される。それが存在論の帰結だ。

#### ●SW 響創マンダラでの統合

##### ■MI (MI) 根源原理・世界観・信念・至高の視座等)

ここは土台だ。ここが浅いと全てが揺らぐ。MIとは「世界はどういう構造で成り立っているか」「自分は何者か」という根本認識だ。宇宙は分化と統合の相互運動であり、陰陽相補の揺らぎが全てを生む。人間もその運動の一部であるという自覚。ここが定まると、被害者意識は消える。偶然の産物ではなく、創造の連鎖の中の一点だと分かるからだ。また、MIは精神的重心だ。重心が低い人間は揺れない。逆にMIが借り物だと、流行や他人の評価に振り回される。MIとは宇宙観、世界観、生命観、人間観、人生観、死生観、仕事観、文明観である。ここが定まると、恐怖の質が変わる。死も失敗も、創造運動の一部として理解できる。

【至高の視座の追加】ここに「主権者」としての自覚を重ねる。世界は客観的な外部物ではなく、あなたの眼差しがその構造を決定づける主権的領域である。宇宙が自己を表現しようとする意志の最先端に自分がいるという認識か、自覚と責任、覚悟を明確にする。

##### ■WA (What) 志・理想・目標・方向性等)

MIが根なら、WAは北極星である。志とは願望ではない。欲望でもない。未来から現在へ作用する引力だ。MIがある人間は、まだ存在していない未来に支配される。これが強さの正体だ。欲望は現在から未来へ向かうが、志は未来から現在を引っ張る。だからブレにくい。MIがないと、人間は環境依存になる。MI(環境・空間・関係性・共鳴等)に飲み込まれる。MIは有限をどう使うかの設計図だ。ここで重要なのは、MIは具体と抽象の両方を持つこと。抽象だけでは燃えない。具体だけでは短命だ。抽象理想+具体目標。この二層構造が志を持続させる。そして目標は、長期と短期の二つを持つこと。

【至高の視座の追加】志のスケールを「宇宙が自己を表現し尽くすこと」への全人的な献身へと拡張する。個人の成功を超え、宇宙の進化そのものと自己の志を同期させることで、未来から現在を支配する引力は非常に強力なものとなる。

##### ■MO (Who) 在り方・姿勢・判断基準等)

≡と≡Aがあっても、≡が弱ければ形にならない。≡とは己の在り方であり、その時その時の選択態度、つまり決断だ。「自分はどうか」これは肩書きではない。姿勢だ。誠実にあるのか、逃げるのか、鍛えるのか、流されるのか。≡は今の瞬間にしか存在しない。だから最も厳しい領域だ。決断は≡の核心だ。≡はエネルギーの向きだ。外に向けて発火するのか、内に閉じるのか。≡は身体性とも直結する。姿勢、視線、歩き方。存在は身体を通して表現される。ここを磨かずに理念だけ語っても空虚になる。≡は理念の身体化だ。ここは己の誠との対話を続けなければ構築されない。己と向き合うことの大切さは今更言うまでもない。

【至高の視座の追加】≡を、宇宙の表現を定ませないための「純粹な導管」としての構えと定義する。エゴや不安、臆病、怠惰等のノイズを排し、宇宙の意志があなたを通じて実行・現実(≡)へと流れ込むための最短経路を維持する。正しい姿勢とは、この宇宙的流動性を確保する責任そのものである。

#### ■≡ (≡) 計画・時間管理・実行・行動等)

≡は抽象を現実にとす回路である。時間をどう設計するか。志をどう日課に落とすか。未来から逆算して今日を決める。≡がない志は妄想で終わる。ここで重要なのは、短期・中期・長期の三層設計。さらに「計測」も必要になる。測れないものは、なかなか改善できない。実行し続けるための秘訣は「百パーセントの稽古」にある。この点については機会があれば詳述する。≡は冷酷さを持つ領域だ。感情ではなく構造で動く。同時に柔軟性も必要だ。状況変化に応じて修正する胆識。≡は未来と現在を繋ぐ橋だ。橋が弱ければ、志は崩落する。

【至高の視座の追加】時間は消費するものではなく、宇宙の意志を現実に結晶化させるための素材である。計測と数値化は、至高の視座から見下ろした際の「宇宙の解像度」を上げる行為であり、一分一秒を宇宙の自己表現として精密に編み上げるプロセスとなる。

#### ■≡ (≡) 関係性・環境・状況・空間・共鳴等)

人間は孤立では完成しない。≡は単なる人間関係ではない。環境・情報・文化・金・自然との関係全体だ。≡は増幅装置でもあり、腐食装置でもある。どの場に身を置くかで成長速度が変わる。ここで重要なのは「和」の再定義だ。和とは迎合ではない。自立した差異ある者同士の統合・調和である。≡は自分を映す鏡だ。敵もまた自分を磨くものとして自分の内側にある存在である。関係性をどう意味づけるかで世界は変わる。創造とは関係の再編であり、≡はその実験場だ。

【至高の視座の追加】≡は主権者であるあなたが統治する「共鳴・響創の場」である。全ての他者や環境は、宇宙の多様性を謳歌し、自己を拡張するためのリソースである。関係の再編とは、宇宙の調和を自らの手でデザインし直す創造的行為に他ならない。

## ■ 五つの統合運動

㊦が根を張り、㊧が方向を定め、㊨が姿勢を整え、㊩が時間を編み、㊪が場を拡張する。この循環が回ると、人間は単なる生存体から創造主体へと変わる。どれか一つ欠けても弱い。㊦だけ強くても独善になる。㊧だけ強くても暴走する。㊨だけでも場当たりの。㊩だけでも機械的。㊪だけでも依存的。五つが噛み合うことで、初めて「宇宙の原理、構造を自覚的に体现する人間」が立ち上がる。

【至高の視座の統合】この五つの運動は、外部に支配されないための「内部秩序」としても機能する。自己統治の構造が宇宙の運行と一致するとき、つまり、やりたいこととやるべきことが自分の中で一つに統合されたとき、あなたは無敵の存在として、この世界を自由に描き出す主体となる。

㊫とは世界の構造であり、かつ自己統治の構造でもある。人間の存在とは、この五層を自覚的に編み直し続ける運動そのものである。固定ではない。更新だ。㊬はあなた自身であり、同時にあなたが認識し得る世界のすべてである。㊭の外側に何かが存在するという錯覚を捨て去ったとき、万物はあなたの内側へと統合される。

言い訳なき人生を、至高の視座から完遂せよ。